

新島襄と詩人エミリ・ディキンソン

奨励	圓月 勝博〔えんげつ・かつひろ〕
奨励者紹介	同志社大学学長補佐 同志社大学文学部教授 〔研究テーマ〕近代英語詩

主こそ王。
全地よ、喜び躍れ。
多くの島々よ、喜び祝え。

密雲と濃霧が主の周りに立ちこめ
正しい裁きが王座の基をなす。
火は御前を進み
周りの敵を焼き滅ぼす。
稲妻は世界を照らし出し
地はそれを見て、身もだえし
山々は☼のように溶ける
主の御前に、全地の主の御前に。
天は主の正しさを告げ知らせ
すべての民はその栄光を仰ぎ見る。

すべて、偶像に仕える者
むなしい神々を誇りとする者は恥を受ける。
神々はすべて、主に向かってひれ伏す。
シオンは聞いて喜び祝い
ユダのおとめらは喜び躍る
主よ、あなたの裁きのゆえに。
あなたは主、全地に君臨されるいと高き神。
神々のすべてを超え、あがめられる神。

主を愛する人は悪を憎む。
主の慈しみに生きる人の魂を主は守り
神に逆らう者の手から助け出してくださる。
神に従う人のためには光を
心のまっすぐな人のためには喜びを
種蒔いてくださる。
神に従う人よ、主にあって喜び祝え。
聖なる御名に感謝をささげよ。
〔詩編 97編 1―12節〕

アーモストの詩人 エミリ・ディキンソン

本日は、伝統あるDoshisha Spirit Weekで、建学の精神に関するお話をする機会を与您にいただき、同志社大学の一員として大変光栄に存じます。今出川キャンパスには、有形文化財に登録されているアーモスト館があることから分かるように、新島先生が学ばれたアーモスト大学との関係を本学が特別に大切にしてきたことは、ここに集ってくださった皆様なら、すでによくご存知だと思います。本日は、新島先生が訪れたアーモストという町には、アメリカ最高の詩人エミリ・ディキンソンが住んでいたということについて、お話しさせていただこうと思います。

ご存知のとおり、新島先生は、1867年から1870年までアーモスト大学で学ばれました。他方、エミリは、1830年にアーモストに生まれ1886年に亡くなるまで、めったに旅をすることもなく、生まれ故郷の町で暮らしていましたので、新島先生とエミリは、3年間、アーモストという同じ町で同じ時間を過ごしていたことになります。1870年頃のアーモストは、人口4000人ほどの小さな町で、エミリの家は、アーモスト大学から300メートルほどのところにありました。アメリカが誇る大詩人エミリが新島先生の目と鼻の先で素晴らしい作品を書き続けていたのです。昨年、エミリの伝記映画「静かなる情熱 エミリ・ディキンソン」が公開されて、日本でも話題になりましたが、この映画の中では、新島先生がおられた頃のアーモストの様子が美しい映像で再現されていますので、機会があればぜひともご覧ください。

残念ながら、新島先生とエミリが出会った可能性は、ほとんどありません。後半生のエミリは、自室からめったに出ることのない隠遁者のような生活を送っていたからです。エミリは、10歳の時、アーモスト・アカデミーという地元の男女共学の学校に入学し、17歳になった時、アーモストから3キロほど離れたマウント・ホリヨーク女学校に進学しました。ちなみに、このマウント・ホリヨーク女学校は、その後、マウント・ホリヨーク大学に発展し、現在、本学の海外協定大学の一つとなっています。アメリカ屈指の名門女子大学の一つで、海外協定大学の中でも、受入基準が最高レベルの難関校でもあります。英語力に自信のある女子学生の方は、ぜひともマウント・ホリヨーク大学留学にチャレンジしてみてください。

アーモスト大学と信仰復興運動

さて、このように、順調に成長してきたエミリですが、マウント・ホリヨーク女学校をたった1年で中退してしまいます。当時のマウント・ホリヨーク女学校では、生徒一人ひとりに信仰告白を行うことを求めるという習慣がありましたが、エミリはこの習慣に疑問を感じて、教員と摩擦が生じたようです。映画「静かなる情熱」の冒頭でも、信仰告白を拒むエミリが教員によって叱責される場面が描かれていました。そしておそらく、この種の事件をきっかけとして、エミリは学校をやめてアーモストの自宅に戻り、周囲の人々から距離を取り始め、やがて教会に行くこともやめてしまいました。

教会との関係という点で、新島先生とエミリは、正反対の関係にあります。当時のニューイングランドでは、信仰復興運動が盛り上がっていました。近代化が急速に進む19世紀アメリカの中で、伝統的なキリスト教文化が見失われがちになることを憂慮した人々は、厳格な信仰を次世代の人々に伝えることに躍起になっていたのです。1821年のアーモスト大学の設立も、そのような社会風潮の一環です。自分たちが大切にしている文化を子孫に教えるために、自分たちの教育機関を自分たちの手で創ろうとする19世紀のアーモストの人々の情熱の賜物がアーモスト大学だったのです。エミリの祖父もアーモスト大学設立の中心人物でした。ディキンソン家は、アーモスト大学の歴史と深いかわりをもつ地元の名家だったのです。

このような時代のアーモストに到着なさった新島先生は、地域社会の中に深く根差して、信仰と学問を一体化するアーモスト大学の中に、未来の日本の教育の理想を発見なさったのです。それに対して、アーモストの町で育ったエミリは、信仰を学校などで若者に強制することは、自由意志に基づく本物の信仰の衰退をかえって招いてしまうと反発したのです。新島先生が感銘を受けられたものに対して、エミリは疑問を感じたという点で、二人は正反対の関係にあると私は考えています。言うまでもなく、どちらが正しいというような単純な問題ではありません。

エミリの詩と賛美歌

エミリは、このようなわけで、アーモストの間から身を隠しました。自室に閉じこもった彼女が詩を書いていることは、親しい人の一部には知られていましたが、生前に活字になった作品は、当時の雑誌に掲載された10編だけで、アメリカ最高の詩人として文学史にその名を残すことになることなどは、誰も想像さえしていませんでした。ところが、1886年にエミリが亡くなった後、家族が部屋を整理すると、1800編近い詩の原稿が次々に出てきました。そして、その一部が詩集として死後出版されると、たちまち大きな評判になり、今では、19世紀のアーモストが生み出した偉大な詩人として、世界中で不動の評価を得るに至っているのです。

教会からは足が遠のいていたエミリですが、彼女の残した詩は、ほとんどが賛美歌の韻律で書かれており、キリスト教の深い影響を示しています。有名な詩を一つ読んでみましょう。この作品は3連からできていますが、本日は最初の1連だけ紹介します。この作品にご興味をおもちになられたら、岩波文庫の亀井俊介編『対訳 ディキンソン詩集』（1998年）に収録されておりますので、そちらをご覧ください。手頃で優れたエミリの詩の入門書です。

（本稿におけるエミリの詩は、R・W・フランクリン編のThe Poems of Emily Dickinson: Reading Edition〔Cambridge, Mass: Harvard UP, 1999〕に拠るものとし、拙訳を付します）。

Some keep the Sabbath going to Church – I keep it, staying at Home – With a Bobolink for a Chorister – And an Orchard, for a Dome –	
教会に行つて安息日を守る人がいますー わたしは家に残つて安息日を守りますー ボボリンクが聖歌隊ですー 果樹園が円天井のある建物ですー	

2行目の行末の単語“Home”と4行目の行末の単語“Dome”が韻を踏む4行連になっています。これが英語の賛美歌の基本的な詩形です。安息日、すなわち日曜日に教会に行く人がいるが、自分は教会に行かず家に残る、と語り手は明言します。だからと言って、教会自体を否定しているわけではありません。彼女には、自然という彼女だけの教会があるのです。ボボリンクというのは、コメクイドリと訳される鳥の一種ですが、その鳴き声が「ボボリンク」と聞こえるので、擬音語がそのまま正式の名前になった鳥です。果樹園の木々の中から聞こえてくる鳥のさえずりに耳を澄まして、自然の中の生命の尊さを実感しながら、神を思ふエミリの感性を聴覚的に伝えてくれる魅力的な単語です。自然こそ本当の教会であるという考えは、新島先生の助言に従つてアーモスト大学で学び、キリスト教信仰に目覚めることになる内村鑑三もしばしば述べていました。内村と言えば、制度としての教会の特権的な価値を認めない無教会主義のリーダーとなつて、近代日本に大きな影響を与えることになる人物ですが、エミリの教会観は、新島先生よりもむしろ内村の教会観に近いと言えるかもしれません。

良心という乳母

しかし、アーモストという同じ場所で同じ時間を過ごしていた新島先生とエミリの間には、大事な共通点もあります。良心を何よりも大切にするというキリスト教精神です。次の作品は、エミリがこの世を去る2年前に書かれた晩年の作品です。先ほどの作品ほど一般的には有名ではありませんが、良心教育を建学の精神とする同志社大学に学ぶ者にとっては、忘れてはならない作品です。

Who is it seeks my Pillow Nights, With plain inspecting face – “Did you” or “Did you not,” to ask – ‘Tis “Conscience,” Childhood’s Nurse –	
わたしの枕元に夜な夜なやってくるのは誰かしら、 何かを確かめようとする飾り気のない顔をしてー 「したの」それとも「しなかったの」と尋ねるためにー それは「良心」、子どものための乳母ー	

静かな人生を選んだエミリは、毎晩、その日を振り返つて、「良心」と語り合っていたのです。するべきことをしたのか、それともしなかったのか、自らに問い続けることを促すものが「良心」です。「良心」とは「子どものための乳母」のようなものだ説明されています。この作品を書いた時、エミリは50代半ばですから、人間的な基準に照らせば立派な大人ですが、神の目から見たら、どのように立派な人間も、いつまでも未熟な「子ども」にすぎません。この世に生きている限り、神が与えてくださった「良心」の声に従いながら、老若男女すべての人間は、謙虚に成長し続けなければならないのです。

「良心」を女性として擬人化するこの作品は、次のような4行で完結します。

With Martial Hand she strokes the Hair Upon my wincing Head – “All” Rogues “shall have their part in” what – The Phosphorous of God –	
戦士のような手で彼女は私のたじろぐ頭の 髪の毛を撫でてくれたー 「すべての」悪人には「報いがある」、どんな報いですってー それは神の燐ー	

「良心」は、頭を優しく撫でてくれますが、その手は、戦士のような手なのです。エミリが描く「良心」は、未熟な人間を励ましてくれる優しさとともに、敵に対しては戦うことも辞さない厳しさもっています。最後の2行は、少し分かりにくいかもしれませんが。原文には引用符が正確に付けられていて、その引用句の出典を調べれば、それがヨハネの黙示録21章8節への言及であることが分かる仕掛けになっています。正しく生きなかった者に対する「報いは、火と硫黄の燃える地である」という一節です。正しく生きなかった者は、地獄に墮ちるという良心の厳しい言葉が記されているのです。

「神の燐」

エミリは、教会からは遠ざかっていましたが、聖書の言葉に寄り添いながら、自らの良心とずっと語り合っていたのです。ただし、地獄の業火を描くに際して、「火と硫黄の燃える地」という聖書の言葉を言い換えて、「神の燐」という目新しい化学用語を使った大胆かつ斬新なイメージを創り出すところが詩人エミリの真骨頂です。この種の冒険的な言語表現を紡ぎ出すことによって、エミリは現代詩の先駆者として高い評価を受けることになったのです。

新島先生とエミリが暮らしていた頃のアーモストでは、信仰復興と並行して、農業改革も大きな関心を集めていました。近代化が進展すると、人口が増加します。実際、アーモストの人口は、1800年には1000人少でしたが、1900年には、5000人を超えています。わずか100年の間で5倍になっているのです。これだけ人口が急速に増加すると、食料自給を担保する新たな方策を実行することが急務となります。食料の生産性を向上させるためには農業改革が必須であり、農業改革には肥料の改良が必須であり、肥料の改良には化学の知識が必須ですので、当時のアーモストでは、化学教育の普及も熱心に行われていたのです。新島先生に化学を教えた教員は、「少年よ大志を抱け」の言葉で有名なクラーク博士です。自分が教えた最初の日本人は新島である、と晩年のクラーク博士は述懐していたそうです。クラーク博士は、当初、アーモスト大学教授でしたが、農業改革に関する見識を買われて、1863年に同じアーモストに新設されたマサチューセッツ農科大学（現マサチューセッツ大学アーモスト校）に1867年に移籍し、やがて第3代学長になり、さらに、1876年、海を越えて札幌農学校に招聘されて、先ほど触れた内村鑑三など優れた人物が輩出する下地を作りました。近代日本のプロテスタント史において、大きな役割を果たした札幌バンド

の形成の契機となった人物です。キリスト教と農業改革の重要性を語って、明治日本の若者を奮い立たせたクラーク博士は、信仰と化学を重視した19世紀アーモストの文化を体現する人物と言えるでしょう。

キリスト教と理化学

エミリが学んだアーモスト・アカデミーにも、化学が正課科目として設置されていたことが研究者によって確認されています。燐という物質は、マッチに利用される発火性の高い物質であるとともに、植物の生長に必須の物質でもあり、窒素とカリウムとともに、肥料の三大要素ですので、当時のアーモストの化学教育において、最重要専門用語の一つとして、エミリの記憶に深く刻みつけられたのでしょう。そして、聖書が描く地獄の業火を思い描いた時、「燐」という化学用語が彼女の頭に真っ先に浮かんだのです。人々に豊かな自然の恵みを与えてくれるとともに、すべてを容赦なく焼き尽くすこともある化学物質「燐」が神の愛と怒りの隠喩となったのです。エミリの詩の中で、「神の燐」というキリスト教と化学の意外な組み合わせを生み出したアーモストの文化は、キリスト教教育と理化学教育の重要性をアーモストで学ばれた新島先生の志をとおして、今ではともに重要文化財に指定されている同志社礼拝堂とハリス理化学館という二つの建物が並び立つ今出川キャンパスを生み出すことになりました。今出川キャンパスの風景の中にも、さまざまな人々のさまざまな思いを生み出してきた奥深い歴史があるのです。

エミリが言及しているヨハネの黙示録21章は、正しく生きなかつた者には厳しい裁きが待っていることを告げる神の怒りの言葉であるとともに、正しく生きた者には神の国が待っていることを告げる神の愛の言葉でもあります。ヨハネの黙示録21章は、次のように始まります。「わたしはまた、新しい天と新しい地を見た。（略）更にわたしは、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために着飾った花嫁のように用意を整えて、神のもとを離れ、天から下って来るのを見た」。人生の終わりに近づいて、「良心」と語り合いながら、「新しいエルサレム」の到来を待ち望むエミリの言葉は、本年度春学期のチャペル・アワー統一テーマである「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」というマルコによる福音書1章15節と呼応するものでもあります。本日、Doshisha Spirit Weekに集う私たちも、また、集うことができなかった人たちも、エミリの詩に導かれつつ、「良心」が優しさと厳しさの両方を求めていることを忘れないようにしながら、同志社大学の建学の精神の理解をさらに深め、神の前に立つ人間として謙虚に成長し続けていきたいと思います。

2018年5月29日 同志社スピリット・ウィーク春学期
今出川火曜チャペル・アワー「奨励」記録